

高齢者のEOLケアへのアクションリサーチ(2)

ーライフエンディング・ワークの開発ー

川島大輔¹・古賀佳樹¹・葉室亮介^{2, #}

¹中京大学, ²一般社団法人ライフエンディング・ステージ

問題と目的

背景:

- ・ 高齢化率が27.2% (平成30年度版高齢白書)・・・多死社会の到来が目前
- ・ 人生の終焉 (EOL: End-of-Life, EOL) をめぐる様々な議論の活発化
- ・ エンディングノートや終活セミナーなど、高齢者のEOLをめぐる実践は各地で開催
↳ 実証的知見の不足
- ・ ほとんどのツールでは高齢者自身の希望を表明することにとどまっている現状
- ・ 医療現場におけるAdvanced Care Planning (ACP) への関心の高まりとコミュニケーションへの注目
↳ 葬送の希望や遺言など、医療以外の現場で生じるEOLの問題の看過



目的:

- ・ 日本人高齢者のEOLへの態度構造と関連要因を検討した実証的研究の成果 (川島他, 2017; Tanaka et al., in submitting; 辻本他, 2019) を踏まえて、新たな実践的ツール(ライフエンディング・ワーク)を開発する

方法と結果



1. 作成準備:

- ・ エンディングノートや終活に関する冊子・書籍を収集し、分析
- 自身の人生の振り返りや家族の歴史、葬儀や延命治療などについての希望、財産の記録や具体的手続きに必要な情報、遺される人へのメッセージに大きく区別された。
- ・ Advanced directives (AD) の実施困難性とACPの重要性といった近年の動向 (e.g., 角田, 2015; Tulsy, 2005), ライフレビュー (Butler, 1963) とディグニティ・セラピー (Chochinov, 2002) の構成要素、研究班でのこれまでの調査結果などの吟味
- EOLについての他者とのコミュニケーションを促すことを主たるねらいとして設定し、コミュニケーションを賦活させるゲームやワークのコンテンツを収集、整理

2. ワークの構成:

- ・ ナラティブ死生学 (川島, 2011) の観点に基づき、以下の点を重視したワークを構成した。
- ① EOLに関わる特定の事柄 (例えば、延命治療の希望や希望する葬儀の形など) について高齢者が自身の考えを語り、それを周囲の他者が受容的に受け止めること、また人生統合への働きかけにより、死への向きあいとジェネラティビティを促進すること
- ② 既存のツールに含まれているコンテンツならびに調査を通じて把握したEOLへの態度構造 (辻本他, 2019) をもとに作成すること
- ③ ゲーム性を高めるための工夫 (例えば、すごろくをベースとして目標ポイントに早く達したものが勝ち、トラブルマスを設定する、明確なルールの設定、全員が意見を述べるカードやサポートカードといった特殊要素も盛り込むなど) を行うこと

3. ワークの再構成

- ・ 試作したワークを、心理学を学ぶ大学生や高齢者のグループを対象として実施し、そこでの感想や意見をもとにコンテンツやルールの修正等を行った。
- ・ 中京大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。
- ・ 本研究はJSPS科研費16K13477からの助成を受けた。

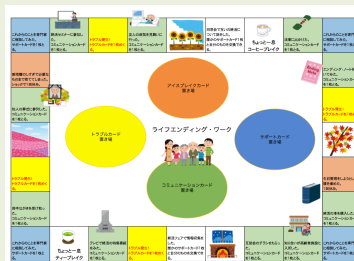
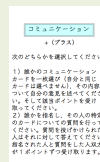
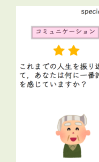
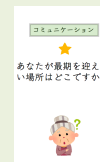
ワークの概要

1. コミュニケーション版:

- ・ コミュニケーションカード (通常、スペシャル、プラス) のみを使用
- ・ 点数はつけず、各自のエンド・オブ・ライフについての考えや態度についてコミュニケーションを図る
- 2. すごろく版:
 - ・ 全ての道具を使用
 - ・ 点数を競い合う形のゲーム形式で行う

カードの種類

1. コミュニケーションカード: EOLに関わる様々なトピックス (医療、介護、葬送、財産等)
2. コミュニケーションカード・スペシャル: 参加者が自身の人生を受容し、尊厳 (dignity) を感じ、次の世代への関心 (generativity) を高めるトピックス
3. コミュニケーションカード・プラス: コミュニケーションの活性化を企図し、他者への質問や自分の意見の表明ができる
4. このほか、トラブルカード、アイスブレイクカード、サポートカードがある



まとめ

1. まとめ

- ・ ゲーミングを通じて高齢者の対人コミュニケーションを促し、そこで醸成された所属感や有能感をもとに自らのEOLに積極的に向き合っていくことを促しうる、実践的ワークが開発された。
- 2. 今後の課題:
 - ・ 効果検証は行っていない → 実際のEOL行動にどのように結びつくのかについての調査研究の必要性
 - ・ ワーク使用に際しての留意事項や使用者の範囲 (利用可能な人と利用が難しい人の区別) についても、さらに検討が必要